

杉原一司全集のために
— 準備稿 (三三) —

岡村知子・杉田佳凜・田中仁

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第20巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 20 / No. 2

令和5年12月22日発行 December 22, 2023

杉原一司全集のために

— 準備稿(三) —

キーワード…杉原一司、全集、未刊資料、既刊著作目録

『地域学論集』第二〇巻第一号に「杉原一司全集のために—準備稿(二)—」と題し、既刊の著作目録と、田中仁の報告「杉原一司の手帳・ノート等未刊資料の年次(一)」とを発表した。その後、新たな既刊著作が発見されたため、補訂版を次頁より掲載する。新たに追加した著作は、資料番号1・2・3・5であり、資料番号69の刊行年の誤りを正した。この目録は、杉田佳凜をはじめとして著者三名が資料の発掘・整理を行うことで作成したものである。また、田中仁の報告は、前稿で取り上げた『未定稿I』以外の未刊資料について、その成立過程・時期を考察したものである。

今回、目録に追加した著作の掲載誌『やまと』は、戦時下、全国的に押し進められた用紙統制と雑誌統廃合の圧力を受けて、『帯木』『民族短歌』『街道』の三誌を統合したメディアとして、一九四四年七月一日に創刊された。『民族短歌』の顧問を務めていた前川佐美雄は、『やまと』創刊に参画し、創刊号に「覚書(一)」と「金剛抄」五首を発表している。現存が確認できている、一司宛前川書簡の最も古いものは、一九四四年四月二六日付のものであり、同年一〇月五日付書簡には、「やまと」への投稿歌は「小生の方へ送つてよろしく 京都へ送ると 二重になるから必ず小生の方へ送られたし」とあることから、一司は前川との関係をきっかけとして『やまと』に投稿し始めたものと思われる。

誌面からは、検閲を意識し、「歌道報国に専念」(「編輯後記」創刊号)する姿勢が感じられることは言うまでもないが、個々の掲載歌に目をやると、前線や銃後の営みを想起させつつ人心を鼓舞するものと、反対に時局を捨象し、自然や内面に没入していくかに見える歌とに大別される。前川歌に

* 岡村 知子・* 杉田 佳凜・* 田中仁

はかなりの頻度で前者の歌が見られるが、一司歌一三首には、後者の志向性が一貫している。

けざやかに空輝りわたる夏雲を超えて遂げなむわが願ひあり
花いくつ露にしめれるばら垣を超えてゆかむと願ふあはれさ

右に挙げた二首(第一巻第三・四号掲載)は、ともに眼前の対象を超えてゆくことを願う(或いは、超えた先で願いを遂げんとする)心性が詠われているが、超えるべき対象が忌まわしきものではなく、眩しく美しきものであることが、読む者に一抹の違和感を抱かせる。不特定多数の他者に、美と認められた装いそれ自体を希求し得ず、願いが素通りしていくほかに、いとところに、作者の孤独は担保される。『やまと』は京都大学附属図書館に所蔵されているが、欠号である第一巻第五号にも一司歌が掲載されている可能性が高いため、情報提供を切に願う次第である。

また歌誌の統合と言えば、鳥取県においては、一九四〇年に『曠野』『太藺』『静脈』が合併し、『新稲葉集』(鳥取新興歌人会 一九四〇年一二月)が編纂され、翌年『國原』が創刊される。中でも、前衛的な自由律短歌が誌面を飾る『曠野』には、後に『花軸』に集うこととなる清水達も参加しており、鳥取商業学校で歌を覚え始めた十代半ばの一司が影響を受けた可能性についても、検討してみる必要があるだろう。(岡村知子)

* 鳥取大学地域学部准教授

** 鳥取大学附属図書館職員

*** 鳥取大学名誉教授

杉原一司既刊著作目録（補訂版）

一九四四（昭和一九）年

							標題（一首目初句、一文目第一文節）	掲載書誌	発行元	発行日付	巻号	備考
1	（あの山も）	やまと	大雅堂	七月一日	一卷一号	短歌一首。「第二欄」。						
2	（重々と）	やまと	大雅堂	九月一日	一卷三号	短歌四首。「作品二」欄。						
3	（日の暮れと）	やまと	大雅堂	九月一日	一卷三号	短歌二首。「作品三」欄。						
4	（かげり来る）	やまと	大雅堂	一〇月一日	一卷四号	短歌三首。「作品二」欄。						
5	（秋夜空）	やまと	大雅堂	一二月一日	一卷六号	短歌二首。「作品二」欄。						

一九四五（昭和二〇）年

6	（秋日中）	やまと	大雅堂	一月一日	二巻一号	短歌一首。						
---	-------	-----	-----	------	------	-------	--	--	--	--	--	--

一九四六（昭和二一）年

7	（かつて我）	オレンヂ	臼井書房	一月一日	一卷一号	短歌五首。「同人作品1」欄。						
8	（さからはず）	詩歌祭	詩歌研究会	一月一〇日	一号	短歌二首。						
9	（かぞかなる）	詩歌祭	詩歌研究会	一月一〇日	一号	短歌一首。						
10	（毒茸を）	詩歌祭	詩歌研究会	一月一〇日	一号	俳句一句。						
11	（少年の）	詩歌祭	詩歌研究会	一月三〇日	二号	短歌三首。						
12	（菊百花）	詩歌祭	詩歌研究会	一月三〇日	二号	俳句二句。						

一九四七（昭和二二）年

13	（薄いコップの）	オレンヂ	臼井書房	一月一日	一卷二号	短歌三首。「同人作品」欄。						
----	----------	------	------	------	------	---------------	--	--	--	--	--	--

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
落果について	論落	(向つ腹を)	詩歌雑談	思ふ	「短歌の宿命」について	歌論的断片	雑歌	坂口安吾について語る會	豚と陽炎	岐路に立つ定型詩	マノンの恋	(硝子器の)	編輯後記	肯定	裸形の文學―眞実と羞恥について―	(憎しみの)	(沈黙の)
歌集 落果	圓坐	花軸	花軸	花軸	花軸	花軸	花軸	花軸	花軸	花軸	花軸	オレンヂ	詩歌祭	詩歌祭	詩歌祭	詩歌祭	詩歌祭
鳥取詩歌叢書	圓坐荘	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	白井書房	詩歌研究会	詩歌研究会	詩歌研究会	詩歌研究会	詩歌研究会
八月二五日	八月二〇日	七月一〇日	七月一〇日	七月一〇日	六月一日	六月一日	六月一日	五月一日	五月一日	四月一〇日	四月一〇日	三月一日	二月二八日	二月二八日	一月三一日	一月三一日	一月一日
	二卷八号(八月号)	一卷四号(七月号)	一卷四号(七月号)	一卷四号(七月号)	一卷三号(六月号)	一卷三号(六月号)	一卷三号(六月号)	一卷二号(五月号)	一卷二号(五月号)	一卷一号(四月号)	一卷一号(四月号)	二卷三号	五号	五号	四号	四号	三号
掲載書著者：中林則男。	短歌五首。タイトルは「淪落」の誤りか。	短文。「Promenade・2」欄。	対談。参加者：小谷政・杉原一司。	短歌三首。	評論。	評論。	短歌一〇首。	座談会。参加者：尾崎不忘(司会)・小谷五郎・岩村泰治・杉原一司・坂本好秋(速記)。	短歌五首。	評論。「特集 第二藝術の問題」。	短歌六首。	短歌六首。「作品三」欄。	「杉原」と署名あり。	短歌三首。	評論。	短歌四首。	短歌六首。奥付の刊行年は「昭和二十一年」となっているが、誤植と思われる。

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	一九四八（昭和二三）年	35	34	33	32
二十代の角度	アクロバット論	戦後歌壇の悲劇	（殉難の）	（底深い）	（私も）	批評	（現今の）	暗夜篇	（いづことも）	陶酔の韻律	みづからの鞭―二十代の角度―		世代	エッセイ的傾向について	路上	（倒れたる）
落穂	くれなゐ	くれなゐ	オレンジ	新聲	花軸	花軸	花軸	花軸	新聲	花軸	オレンジ	花軸	花軸	花軸	花軸	オレンジ
鳥谷好松			オレンジ社	新聲発行所	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	新聲発行所	花軸社	白井書房	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	白井書房
八月一七日	八月一日	六月一日	八月一日	四月一日	三月二〇日	二月二〇日	二月二〇日	二月二〇日	二月一日	一月二〇日	一月一日	一〇月一〇日	一〇月一〇日	一〇月一〇日	一〇月一〇日	一〇月一日
一号	四巻五号（三九輯）	四巻四号（三八輯）	二巻六号		八号	七号	七号	七号		六号	二巻五号	五号（一〇月号）	五号（一〇月号）	五号（一〇月号）	五号（一〇月号）	二巻四号
評論。資料番号32の抄録。	評論。	評論。「歌壇時評」欄。	短歌五首。「作品 其二」欄。	日は四月一日。日発行「四月号」と記されたもの、日発行「五月号」と記されたもの、五月一日は四月一日。同誌面であり、ともに奥付の発行	短文。「Promenade」欄。	短文。	短文。「Promenade」欄。	短歌一五首。	短歌五首。目次に「杉原一汀」とある。「短歌」欄	評論。	評論。	短文。	短文。	短歌四首。	短歌四首。「作品 其二」欄。	

63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
砂丘	(新歌人集團の)	(2) 循環	内部について	(獸肉を)	おぼえがき ごくそぼく でしかもちひさな	戯作	(2) 速度	感傷排除の態度	商談	風景	方法の位置……やさしい短歌論……	指手	座談会 三十世代の短歌観	(卵黄に)	抒情性の支柱―現代短歌批判―
メトード	メトード	メトード	メトード	情脈叢書第十七 篇 歌集 海嘯	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	風物	風物	オレンヂ
メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	圓坐社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	風物社	風物社	オレンヂ社
一二月二五日	一月一日	一月一日	一月一日	一月二〇日	一月一日	一月一日	九月一日	九月一日	九月一日	九月一日	八月一日	八月一日	三月一日	三月一日	一月一日
一卷五号	一卷四号	一卷四号	一卷四号		一卷三号	一卷三号	一卷二号	一卷二号	一卷二号	一卷二号	一卷一号	一卷一号	六輯	六輯	三巻一号
随筆。	コラム。「視覚」欄。	短文。「フオワイエ」欄。	短歌七首。	短歌四首。枝野登代秋編。	覚え書き。	短歌三首。	短文。「フオワイエ」欄。	評論。	短歌二首。署名は「早川則之」。	短歌一首。	評論。	短歌四首。	座談会。 参加者：浅井好四郎・和田周三・下條義雄・杉原一司・福井秋良・頭田島一二郎(司会)。	短歌二首。	評論。

71	あくびする花	現代短歌大系 第一巻	三一書房	六月三〇日		短歌六〇首。掲載書編者：大岡信・塚本邦雄・中井英夫。
一九七三（昭和四八）年						
70	初等文法	短歌	角川書店	八月一日	八月号	短歌六〇首。特集「戦後新鋭百人集（續篇）」。顔写真、略歴を付す。
一九五六（昭和三一）年						
69	（鉛錘の）	日本短歌	日本短歌社	二月一日	二三巻二号	短歌四八首。「夭折歌人作品集」欄に、塚本邦雄による一司の紹介文とともに掲載。奥付の刊行年は「昭和二十八年」となっているが、誤植と思われる。
一九五四（昭和二九）年						
68	（2） 漫畫	メトード	メトード社	二月一〇日	二巻二号	短文。「FOYER」欄。
67	人間性と主題性	メトード	メトード社	二月一〇日	二巻二号	評論。
66	初等文法	メトード	メトード社	二月一〇日	二巻二号	短歌五首。
65	第三の世界	メトード	メトード社	一月一〇日	二巻一号	評論。「特集 世紀のなかば」。
64	失意の歌	メトード	メトード社	一月一〇日	二巻一号	短歌三首。
一九五〇（昭和二五）年						

（岡村知子・杉田佳凜・田中仁）

《報告》

杉原一司の手帳・ノート等未刊資料の年次(二)

杉原一司の手帳・ノート等には書きつけられている短歌、俳句等の作品がいつ作られたのか、そしていつそこに書きつけられたのか、現在までに知ることのできた資料にもとづいて考え、まとめておきたい。その試みの一環として、「杉原一司の手帳・ノート等未刊資料の年次(一)」(本誌第二〇巻第一号 令和五年八月二五日発行。以下「前稿」)において、『未定稿1』(五二)について考えてみた。本稿ではつづいて『未定稿1』挟み紙1以下をとりあげるが、その前に、前稿における不行届や誤りを正しておかねばならない。三件あり、三件めは二つの誤りが重なっている。一件目は、次のようにノート(五四)とノート(一五五)の関係を曖昧なままにしたことである。

ノート(五四)とノート(一五五)とは、今私の手許にある写真では同一のノートのように見えるが、挟み込み紙が異なっている。ここでは付されている整理番号にしたがいしばらく別資料としておく。(七頁)

その後、原資料の確認により(五四)と(一五五)とは、同一のノートが別番号で撮影されたものであることがわかった。(五四)として撮影された時と(一五五)として撮影され時との間に、展示会や調査などともなつて種々の動きがあり、そうした混乱が生じたものらしい。

そこで、「ノート(一五五)」を資料目録から削除し、挟み込み紙はノート(五四)の挟み込み紙3とする。現在までに確認できている杉原ほさき氏所蔵未刊行資料の一覧をあらためて掲げると次のようになる。補足した項目をゴシック体で示し、削除すべき項目には縦線を重ね書きする。なお、【2】【9】【10】の資料名になかった『』を今回新たに付した。【1】の(1)『未定稿1』、【12】『試論研究篇1 詩論 芸術論』と同じく一司自身の命名だからである。

- 【1】の(1) 『未定稿1』 (五二) 「とうとうと」
 【1】の(2) 『未定稿1』 挟み込み封筒 「つむじなす」

- 【1】の(3) 『未定稿1』 挟み込み紙1 「春の街は」
 【1】の(4) 『未定稿1』 挟み込み紙2 「樹を撃てば」
 【1】の(5) 『未定稿1』 挟み込み紙3 「時をも呪うて」
 【2】 『散文集 虚無の角笛』 (五三) 「詩を書く者にとつて」
 【3】の(1) ノート(五四) 「書くといふことは」
 【3】の(2) ノート(五四) 挟み込み紙1 「幕舎より」
 【3】の(3) ノート(五四) 挟み込み紙2 「高々と」
 【3】の(4) ノート(五四) 挟み込み紙3 「日本国憲法の特徴」
 【4】 歌稿 「楽しい朱書の思出」
 【5】 中林則男歌集『落果』編集メモ(一四〇)
 【6】 「歌集 落花 中林則男」
 【7】 緑表紙手帳(一四一) 「急くことも」
 【8】 黒表紙手帳(一四二) 「写生の異説抄記 伊藤左千夫の写生説」
 【9】 『俳句手帖』(一四三) 「群盗 木 凍る」
 【9】 『雑記帖』(一五〇) 《An memo moment》
 【10】 『雑記帖』(一五一) 「宗教 一、宗教の本質」
 【11】 ノート(一五二) 「前略 昨日米9升三合いたどきました」
 【12】 『試論研究篇1 詩論 芸術論』(一五三) 「今日の倫理の問題と文学 三木清」
 【13】 ノート(一五四) 「メトード第一号昭和二十四年八月一日発行」
 【14】の(1) ノート(一五五) 「書くといふことは」
 【14】の(2) ノート(一五五) 挟み込み紙 「日本国憲法の特徴」

内容による分類は、訂正のある「II 思索」、「III 編集」のみ掲げ、「I 創作」、「IV 編集」、「V 書簡下書き(または書簡控)」、「VI 職務」、「VII 金銭出納」は省略する。

II 思索

- 【2】 『散文集 虚無の角笛』 (五三)
 【3】の(1) ノート(五四)

- 【7】黒表紙手帳（二四三）＊創作、編集、職務
 【11】ノート（二五四）＊書簡
 【14】ノート（一五五）

III 学習

【3】の（4）ノート（五四）挟み込み紙3

- 【9】『雑記帖』（二五〇）
 【10】『雑記帖』（一五一）
 【12】『試論研究篇1 詩論 芸術論』（二五三）

二件目は、「夭折歌人作品集」の一部として一司の短歌四十八首の載る『日本短歌』第二十三巻第二号の発行日を、昭和二十八年二月一日とした（一〇頁）ことである。それが誤りであること、正しくは昭和二十九年二月一日であることを、二〇二三年九月二日の連絡会における岡村氏、杉田氏の教示により知った。奥付にしたがったのであるが、その奥付が誤っていた。

三件目の二つの誤りも、「夭折歌人作品集」にかかわっている。そこに掲げられている一司の四十八首の四十番目に、

しのびかにしたがふ日々よきよらけく雲を超えゆく雲が羨しも

という歌がある。誤りの一つは、前稿で右の歌を引用したさい、結句の「羨」を落としてしまったことである。二つ目については、「夭折歌人作品集」と『未定稿1』との関係について、前稿と重複するが少し説明が必要だと思ふ。

前稿で取りあげた『未定稿1』には、短歌六十首が収録されている。そのうち六首が「夭折歌人作品集」杉原一司の部（以下「作品集」）の歌と重なっており、「作品集」の編者、おそらく塚本邦雄は、『未定稿1』からこれら六首を選び出した可能性がある。次のように、『未定稿1』との重複歌が三十七首目から四十二首目まで連続しており、しかもそれらの歌の前後関係が、『未定稿1』と一致しているからである。

とうとうと	「作品集」〈37〉	『未定稿1』〈1〉
秋ふけて	同	同
冬やまの	同	同
しのびかに	同	同

かげ淡き 同 〈41〉
 樹々に鳴る 同 〈42〉

加えて、「秋ふけて」以下の五首は、『未定稿1』のほかには「作品集」より後に選歌・編集された『短歌』昭和三十一年八月号の「初等文法」と現代短歌大系第十一巻『新人賞作品・夭折歌人集・現代新鋭集』の「あくびする花」と以外に、現時点では見られない。また、一首目の「とうとうと」は、「初等文法」、「あくびする花」のほかに鳥取で刊行されていた『円坐』第二巻第八号（昭和二十二年八月二十日発行）にも載っているが、「論落」という題がある。ところが、「作品集」は四十八首のうち十六首に、

鉛錐のつり下げられてうごかざる暗室内を飛翔する針（内部について）

のように歌の下に（ ）でくくって題を付記しているにもかかわらず、「とうとうと」にはそれが無い。「作品集」が題を付記しないのは、右の歌と同じ題であることを表していることが多い。「とうとうと」もそうであるなら、三首前の、

獣肉をつるせる店の前ゆくと罪の意識の消しさがたき（秋の唄）

と同じ題ということになる。しかしその場合、二首後の、

冬やまの崖のま下に凍てて立つ石あり神のごともかなしも

の題も「秋の唄」ということになり、不自然である。

以上の三点、

①配列の先後関係が一致していること

②「秋ふけて」以下五首は「初等文法」、「あくびする花」以外にはみられないこと

③「とうとうと」に題が付記されていないこと
 これらのうち、②は現時点ではとうとうとどまり、③は『円坐』からとつたものではないことを示すにとどまるが、「作品集」の「とうとうと」以下の六首は『未定稿1』から抄出された、と推定すれば説明できる事実ではある。

しかし、そうした推定をさまたげる事実がいくつかある。『未定稿1』は歌の題を記していないにもかかわらず、「作品集」四十番目の「しのびかに」の歌に「終末の唄」という題が付記されていることである。そこで前稿では、「現時点では『未定稿1』か塚本のかかわった文献以外にはみ

えない歌の掲載されている文献が、今後見つかる可能性は大いにある」(二頁)、また、「この歌がみえるのは、『未定稿1』のほかは『日本短歌』「夭折歌人作品集」、『短歌』「初等文法」、『大系』「あくびする花」のみであるが、「夭折歌人作品集」は、歌の下に()でくくって題を掲げており、この歌には、「終末の唄」とある。『未定稿1』にはどの歌にも題はないから、これは「しのびかに」が「終末の唄」という題のもとに掲載されている文献があることを示唆する事実と見てよいであろう」(同前)など書いた。

誤りは、「掲載されている文献」である。このとき考えていた「文献」は刊行物、なかでも歌誌『くれなゐ』であった。私の見ることできた『くれなゐ』は、一司の評論「戦後歌壇の悲劇」の載る第四巻第四号通巻第三十八号(昭和二十三年六月一日発行)の複写のみであるが、その作品欄に掲載されている歌には多くの場合題がある。

しかし、『未定稿1』では題のない「しのびかに」の歌に、「夭折歌人作品集」では「終末の唄」という題が付記されているという事実が示唆するのは、「しのびかに」が「終末の唄」という題のもとに掲載されている刊行物があるということだけではない。刊行物だけではなく、書簡【34】の「初等修辞学」九首、【50】の「ヘコツペリア」一パレエ六首、【85】の「北方種族」三首のように、書簡に同封して、または書簡として塚本に送ったのかもしれないし、ノート・手帳類に書きつけられていたのかもしれない。あるいはその両方であったかもしれないし、どちらでもなく、前稿で『未定稿1』の

〈18〉あざやけき死のちらちらとうかびくる日ぐれは禽も啼くとせな
く

〈48〉押せば開くとびらくぐりて出でしときひくくたれたる雲をみと
めぬ

について記した(二二頁)ように、歌会で知ったということもあり得よう。刊行物に限定するのは誤りである。

では、「しのびかに」の歌は、結局のところどこからとったのか。この歌が「終末の唄」という題のもとに掲載されている、または書きつけられている資料からなのか、『未定稿1』からなのか、またはどちらでもあるのか、どちらでもないのか、いろいろに考えられるが、現時点ではわからないというほかはない。

(田中 仁)

三 作歌・資料成立の年次

I 創作にかかわる資料(承前)

2 【1】の(2) 未定稿1 挟み込み封筒

○内容 表に短歌三首、裏に短歌二首。計五首。その他裏に、「粒」、
「所詮短歌」、「起伏」等のすさみ書きあり。

○他文献との対応
ナシ

【1】の(2)すなわち本資料をふくめて、【1】の(3)、【1】の(4)、【1】の(5)の四点は、『未定稿1』の二十四頁目(料紙十二枚目)と二十五頁目(料紙十三枚目)の間に、前から(2)、(3)、(4)、(5)の順に挟み込まれている。『未定稿1』の二十四頁目には、六十首中の終わりの三首である〈58〉「とほじろく」、〈59〉「冬白き」、が書きつけられ、二十五頁目以下は白紙になっている。したがって、誰かが〈60〉「樹々に鳴る」の後ろに転記しようとしてここに挟み込み、転記しないままになった、その「誰か」は一司自身である、という可能性は皆無ではない。しかし、これら四点が、いつ、誰によって、どのような理由・事情により『未定稿1』のこの頁に挟み込まれたのかは、実はまったく不明と言わざるを得ない。したがって、四点に書きつけられている短歌等の作られた時、書きつけられた時を、『未定稿1』の成立年次と結びつけて考えることはできない。

また、これら四点に書きつけられている短歌等に、現時点で他資料に見られるものはない。そのため、年次のわかる他資料との対応に基づいて作歌・成立年次を推定するという方法も使えない。ここでは「内容」のみ略記しておく。なお、3以下で「歌案〇首分」という場合の、「歌案」は田中の私見である。書きつけられている語句が詩でも俳句でもなく短歌の案だとは言えない例もあるし、そもそもジャンルの意識はなく、ふと思いついた言葉を書きつけただけなのかもしれない。また、「短歌」や「歌案」の傍らに書きつけられている場合、その短歌または歌案の別案なのか、別

景」一首を出しているからである。二号の締め切りも印刷日の十日前であったとすれば、これら三首は八月二十六日までに作られた、そしてその後の一ヶ月間に作られて第三号に「刺青」を、「瞬間の」が作られたと推定できる。

この推定は、裏面の計算式のなかの「下宿代」と符合する。一司の下宿生活は、杉原一司歌集刊行会編『杉原一司歌集』（総合印刷出版 二〇二〇年三月刊）に付載されている、安藤隆一・杉原ほさき氏作成「杉原一司関係年譜」の「一九四八（昭和二三）年」に、

学

とある天理語専在学時以外には知られていない。したがって、この下宿代の計算は昭和二十三年五月以降に書きつけられたことになる。

問題は、次のような歌と歌案とである。

〔2〕風呂炊きを役とする二等兵なれば帯剣のさびを灰で落すも

帯剣を洗ふ木の

〔13〕戦の□□□□の□□□□を知らぬ兵に兵らは問ひぬ「どちらが勝った」

ラヂオきょしといふ

つた

「杉原一司関係年譜」（前出）の一九四五（昭和二〇）年に、

三月二十七日、応召。（一〇月初めに復員）

とある。右の〔2〕・〔13〕には、この兵役の体験が反映しているかもしれない。明確ではないが、

〔1〕幕舎より抜け 心そ かに 心そ 林抜けて来て生きてありしよ

〔12〕 民の あはれを あはれを あはれを 知らぬ

〔12〕 少将の暗さをはぬくはれざらむ

も同じかもしれない。もし、そうであるなら、右の歌一首と歌案三首分は、昭和二十年三月二十五日以降、第二次世界大戦終戦の頃までに作られ書きつけられた可能性がある。

しかし、これらのうち〔12〕・〔13〕は、前述のように昭和二十四年八月二十七日頃から同年九月二十五日頃までの間の書きつけと推測される〔4〕・〔6〕よりも左、すなわち後ろに書かれている。〔1〕・〔2〕は〔4〕・〔6〕の右に位置するが、〔4〕が一行目から二行目に書かれ、

〔1〕・〔2〕はその右の欄外に書かれており、書きつけられたのは〔4〕・〔6〕よりも後と考えられる。したがって、もし〔1〕・〔2〕・〔12〕・〔13〕が昭和二十年三月二十五日以降、第二次世界大戦終戦の頃までに書きつけられたものであるなら、〔4〕・〔6〕はその頃またはそれより前の作ということになるが、一司が四年以上前の旧作を『メトード』に掲載するとはとうてい考えられない。〔2〕・〔13〕、あるいはこれらに加えて〔1〕・〔12〕は兵役の体験とは無縁なのか、またはその反映なのか、ただちに判断するのは難しいが、仮に後者であったとしても過去の体験の反映であり、本資料は昭和二十四年八月二十七日頃から同年九月二十五日頃までの間に成立したという推定をさまたげるものではない。

7 [3] の (3) ノート (五四) 挟み込み紙 2

絵日記帳の頁の離れたものである。一方の面には人の顔、山、反対の面には鯉のぼりが鉛筆で描かれている。誰が描いたのかはわからない。前者を表、後者を裏とする。前者の左上隅に⑦、後者の右上隅に⑧と書きつけられているからである。ただし、この数字が本来何を意味するものであったのか不明である。

○内容

表に短歌六首。裏に短歌三首。計九首

○他文献との対応

◇『未定稿1』との対応

〔9〕舞台せましと踊る女人の手の足の伸び／＼と良ききんせいをみよ

〔24〕かるやかに踊る女人の手の足ののびのびとよき均整は見よ

題なし 全六十首その第二十四首

なお、本資料〔8〕は次のようにノート(二五四)の〔53〕と対応している。

〔8〕ダバイスト辻潤が訳したる見れば天才論といふ書かなしも。
 〔53〕ダ、イスト辻潤が訳したる見れば天才論という書かなしも。
 また、〔9〕も次のように同じくノート（二五四）の〔54〕と対応している。

〔9〕舞台せましと踊る女人の手の足の伸び／＼と良ききんせいをみよ
 〔54〕舞台せましと踊る女人の手の足の伸び／＼と良ききんせいをみよ

ノート（二五四）は、一見すると既発表の歌を集めたノートのように見える。〔53〕〔54〕も何らかの刊行物からとったのかもしれない。しかし、これら二首以外については、誌名・巻号、題のある歌の場合は題も明記されている。原拠になっているのは『メトード』、『詩歌祭』、『花軸』の三誌である。それに対してこれらには誌名・巻号とも付されていない。また、〔53〕の第三句の一字目は、本資料では「見」の右に「な」または「打」「抄」のような文字が傍書され、いっぽうのノート（二五四）では、「見」の右に「頁」のような文字が傍書されている。「見」がやや小さく、かつ左に寄っているのが、本行と傍書を合わせると「題」のように見える。おそらく本資料の第三句三文字目と傍書とを、見たまま転記したのである。つまり、ノート（二五四）の〔53〕〔54〕は、本資料〔8〕〔9〕を、理由・事情は不明であるが直接写しとつたものと推測され、所在不明の刊行物の存在を想定する理由にはならない。

○年次

本資料〔9〕と対応する『未定稿1』の〔24〕は、前稿で『未定稿1』に記載されている短歌六十首をA群からC群までの四群に分けたうち、C群に属している。C群は昭和二十二年の秋から冬にかけて作られた歌である。そして、この〔24〕の前後で季節のわかる歌は〔19〕「曼珠沙華ゆめとさくあのうみぞひの段々晶をこえて帰りぬ」、〔27〕「曼珠沙華ひそみ咲く野に墜つる陽よ終末の日の今日にあらぬや」で、どちらも秋である。したがって〔24〕は昭和二十二年秋に作られたと考えられる。〔9〕はその〔24〕と初句と結句の助詞一語とが異なるが、別の歌とせねばならないほどの異同ではない。

そのほか本資料〔3〕は、
 夏の夜の浅きに若きともがらが唱ふ声すも踊れるならむ
 〔4〕は、
 森かげに夕べを合歓のしめり咲きゆく道は多岐に別れてくらし
 と、それぞれ傍線部から夏に作られた歌と考えられる。

書きつけられたのは何時なのか明瞭ではない。九首すべて歌案ではなく完成した歌である。推敲の跡も少ない。しかし、その文字の筆致は早く無造作、また〔1〕と〔4〕以下は鉛筆、〔2〕・〔3〕は濃い青インクが用いられており、末尾の〔9〕「舞台せましと」は同じく鉛筆書きの他の歌にくらべて色が薄い。これらの点からみて、全部を一度ではなく、まとまった都度書きつけたのではないかと推測される。

〔8〕【6】緑表紙手帳（一四一）

緑色紙表紙の手帳。表紙の下辺中央部あたりから右上に向かって、Memorandum という金文字が印刷されている。また、遊紙表に左のような墨書がある。

鳥取縣八頭郡丹比村

杉原一司

○内容

短歌二十一首、俳句三句、歌案五首分。

○他文献との対応

◇『詩歌祭』二号（昭和二十一年十一月三十日刊）との対応

〔11〕おど／＼と人にしたがひゐたる日帳はや口むかしとなりてしまひき
 のく
 はやく
 口の口
 へよ
 〔2〕おど／＼と人に従ひあたる日の早も昔となりてしまへよ
 「短歌（互選）」四点歌 題なし

タベがや
ははし
少年のわれゆせつなく吹きてあし

少年のわれゆせつなく吹きてあし
しきりに
少年の田にかへりたく探せどもあたり土の笛見落し

吹きてあし

〔1〕少年の我はタベが切なくてしきりに土の笛吹きてあし

「短歌（互選）」五首歌 題なし

〔17〕秋ゆくとかはきたる掌をすり合せもみ合せ何を願ふともなし

失ひしものの数を思へり

〔3〕秋逝くとかわきたる掌をすりあはせ失ひしものの数を思へり

「短歌（互選）」三首歌 題なし

〔21〕菊百花少年の志の身よりとほし

〔1〕菊百花少年の志の身よりとほし

「雑詠 尾崎不忘選」十一句 その第一句

〔22〕稲刈りて長子の一生終ふべきか

〔2〕稲刈りて長子の一生終ふべきか

「雑詠 尾崎不忘選」十一句 その第二句

○年次

本資料の短歌・歌案・俳句のうち、短歌二十首は表紙側から書きはじめられ、俳句三句、短歌一首、歌案五首分は、この順で裏表紙側から書きはじめられている。また、表紙側からの短歌二十首と裏表紙側からの俳句三句は鉛筆、同じく裏表紙側からの短歌一首、歌案五首分は濃い青インクで書かれている。こうした状態をふまえ、表紙側からの短歌二十首をA群、裏表紙側からの俳句三句をB群、短歌一首、歌案五首分をC群とする。

〔A群〕

短歌二十首のうち、〔11〕〔16〕〔17〕の三首が、昭和二十一年十一月三十日発行の『詩歌祭』二号に掲載されている。『詩歌祭』に作品を掲載するには、例会へ出す、投稿する、依頼される、の三つの手立てがあった

ようであるが、右の三首が昭和二十一年十一月二十三日の例会に出された歌であることは、次のような二つの根拠により明らかである。一つは、これらが「例会報告（十一月二十三日）」の「短歌（互選）」の部に載っていること、もう一つは、その例会は第一号（昭和二十一年十一月十日刊）に、

十一月例会

日時 十一月二十三日（新嘗祭）午前八時

場所 国民学校礼法室

作品 自由詩一篇、短歌三首、俳句三句程度〔以下判読不能〕

と案内のある例会に違いがないことである。

したがって、これらの三首が作られたのは、昭和二十一年の十一月例会の当日十一月二十三日以前ということになる。さらに、次のような歌における季節からみて秋頃以降と推測される。

〔2〕月の美き夜半をひそかに飛びたちぬ傷痕を身にとどめたるまま

〔3〕月の美き夜半をひそかに飛びたつと古き傷あとなぜさすりあき

〔9〕いつまでをかゝる美しさに澄むものか秋青空もつひに哀しき

〔10〕ゆく秋はこゝろしづかに合はす掌の乾ききりたるさまもむなし

〔12〕ゆく秋の野中に伏せる白き石たゞけど引けど微動だもせぬ

〔13〕秋ゆくと枯葉の中にひそみあてせて春待つ歌を歌はん

〔15〕かはき切りたる枯葉にうもれしどけなく春の歌など唱ひて待た

ん

き

一首目の、

急くこともなくし静かに眠りあむつばさの傷のあとゆるるまで

も夏の夜の歌とは思えない。『詩歌祭』に掲載されている三首のうち〔11〕

〔16〕も、季節を表す語句こそないが、〔11〕は前後の〔10〕〔12〕に

「ゆく秋」があり、〔16〕は〔15〕の「かはき切りたる枯葉」と〔17〕の

「秋ゆく」とにはさまれている。

これら二十首が書きつけられたのは、それぞれの歌の完成後あまり時をおかない頃で、その後、例会に出すにあたって推敲したと考えられる。なぜなら、これら三首に対する推敲の跡がほかの十七首にくらべてきわだつて多いからである。三首以外の推敲は、わずかに「荒々しき巨岩仰ぎ」の「岩」と「仰」の間に「の」を傍書する脱字の補足が一首、「まかせぬ」

の「ぬ」を「ず」に、「ものは」の「は」を「の」に直すという助動詞、助詞の差し替えが各一首のみである。

二十首のうち〈11〉「おど／＼と」、〈16〉「少年の」、〈17〉「秋ゆくと」の三首、つまり『詩歌祭』二号掲載歌の右肩に○印が書きつけられている。例会への提示を決めて○を付した後に推敲したのか、推敲の結果提示するに足りる歌になったので○を付したのか、あるいは○を付した後さらに推敲を重ねたかもしれない。なお、〈2〉の歌と〈3〉の歌との間に「二十一日」とあるが、これが何を意味するのか不明である。

〔B群〕

俳句三句、そのうち二句が『詩歌祭』二号に掲載されている。短歌〈11〉〈16〉〈18〉と同じ号である。この号の「例会報告」には俳句の部もあり、六句句一句、四句句三句、三句句一句、二句句六句が掲げられているが、一司の句が出ているのはそこではなく、「雑詠 尾崎不忘選」の欄である。投稿したとおぼしい。

その場合、投稿締め切り日の幾ばくか前が作句の下限になるはずであるが、『詩歌祭』は、「作品は何時でも結構ですから事務局迄届けて頂き度いと思ひます」（第三号「あとがき」）という方針で、締め切り日を設けていない。また、奥付に印刷日を記していない。したがって、これら二句が作られたのは、第二号発行日の昭和二十一年十一月三十日より前としかわからない。

ただし、『詩歌祭』二号掲載句には「菊」、「稲刈る」、そして『詩歌祭』二号に掲載されていない一句、

つゆじもの朝の間も又ねむりけり

には「露霜」と、秋から晩秋の季語が用いられていることから、昭和二十一年秋のうちに作られたと推測される。A群の二十首は昭和二十一年の秋以降、十一月二十三日までの間に作られたという前記の推定が正しいなら、それらと同じ頃の作ということになる。同じ手帳の表紙側から短歌、裏表紙側から俳句を書きつけたと思われる。

ちなみに、昭和二十一年十一月十日発行『詩歌祭』一号の「作品集（十月十七日互選会に於ける報告）」俳句の部の三点句に、一司の、

毒茸を踏みにじりつゝ悔ひにけり

が見える。昭和二十一年秋にB群の三句に先だって作られた句であろう。

〔C群〕

B群三句目の「つゆじもの」の次に、行空けなしに書きはじめられている。歌と次の歌案との間、また歌案と次の歌案との間にも行空けはない。左に全部を掲げる。改行はもとのまま、頭に数字のないのは前の行とあわせて一首の歌、または一首分の歌案と判断した行である。

〈24〉野ばらの赤き新芽を

山中に行きくるともかへり

みざらむ

〈25〉みつまたの白き花托

〈26〉峡雲へ一すじの道牛追ひて

ゆく男あり

〈27〉けものも早や穴いでて

来よ

〈28〉桧原に入りぬ

何をさがすと

〈29〉頭ガイ骨、釘でとめる、

悪魔天使、夜明

冒頭の〈24〉は、明らかに俳句ではなく短歌である。それにもかかわらず、普通に表紙の側からはじまるA群の短歌の次ではなく、裏表紙からはじまる俳句につづいて書きつけられている。このような普通ではないことがなぜ生じたのか。

考えられる理由に時間の隔たりがある。A群の歌は、前述のように昭和二十一年の秋以降十一月二十三日までの間に作られたと推定される。それに対して〈24〉は、「新芽」が詠みこまれているのでおそらく春に作られた歌である。

『詩歌祭』二号につづいて昭和二十二年一月一日に発行された三号の短歌欄には、「初雪に足駄の跡の続きたる稲架の前で振り返りたる」（藪田潔）、「銀世界見渡す限りきら／＼とよごれた山は今日は変りぬ」（藪田政幸）、「此年も又暮れゆくか待ちみたる兄の消息まだ知れずして」（岡田豊美）等々冬の歌が並ぶ中に一司の六首があり、次のような歌がふくまれている。夏、秋の歌である。

夏となりみだらなおもひなにもなく遠い野めざし自転車とばす

黒シャツをまとひて合歓の花かげに誰待つとなく一日くらす

草露のいまだ上らぬ朝の道この道もとほく行きてはてなし

二号刊行後、歌が出来なかった。しかし、一司は『詩歌祭』の世話人、編集者の一人であり、発行者・発行所である詩歌研究会の事務局は一司宅におかれていた。間違いなく中心メンバーの一人である。そうした立場上、作品を掲載しないわけにはいかない。そこで『詩歌祭』創刊前の作を出した、と考えることもできる。『詩歌祭』第一号は、奥付によれば昭和二十一年十一月十日に発行されている。もし昭和二十一年終わり頃から二十二年初めにかけての冬の間歌が出来なかったとしたら、ようやく作れた歌を旧作ではなく裏表紙側の俳句につづけて書く、というのはあり得ないことではないと思う。

しかし、昭和二十二年一月三十日発行の第四号にも一司の歌四首が載っている。そしてその中には、

ものの芽のいまだも固き冬なるを胸にもやしてゐる炎のひとつ

み冬濃き空の青さも飯かしく暇にあふぐやその澄める眼よ

のように、冬の歌がある。昭和二十一年から二十二年にかけての冬に一司に歌がなかったわけではない。四号の歌は一月一日から三十日の間に作られたものであり第三号には間に合わなかったのかもしれないが、そうであるなら、右に引いた「み冬濃き空の青さも」の歌から(24)「野ばらの赤き新芽を」の歌までの間は、長くても三ヶ月ほどであろうか、あえて「普通ではないこと」をするほど長い作歌の断絶があったとは思えない。

そこで注意したいのは、(29)が(10)でとりあげる『俳句手帖』(一四三)の二行目・三行目の、

頭ガイ骨を釘を止める

夜 悪魔——天使

と、「夜明」と「夜」との相違はあるが酷似していることである。

『俳句手帖』(一四三)は、(10)で述べるように昭和二十四年五月・六月頃から八月頃までの間の歌・歌案が書きつけられていると推測される。その前の昭和二十四年の春の頃に作った歌、思い浮かんだ歌案を、一司は二年半ほど前に用いていた手帳に書きつけていた。A群の短歌ではなくB群の俳句の後ろにつづけたのは、すでに書きつけてある短歌を無視することにより、使い残して放置していた手帳を新たな手帳として用いるための方途であった。もし俳句ができたなら、B群ではなくA群の後ろに書きとめたであろう。しかし、その後、『俳句手帖』を用いることにした。一司が『俳句手帖』を入手したのは、奥付の昭和二十四年二月五日頃以降のことと推

測される。転記のさい、捨てがたかった「頭ガイ骨、……」を、少し改変して最初の頁に書きつけた。『俳句手帖』冒頭の「群盗 木 凍る」は、「頭ガイ骨、……」より前、おそらく冬のうちに得た歌案で、本資料以外の何かに書きつけていたか、記憶していたのか、これもやはり捨てがたいものだった。

このように考えれば、いちおう辻褄はあうように思う。緑表紙手帳(一四一)が資料として現在の形になったのは、昭和二十四年春頃ということになる。しかし、問題は残っている。『詩歌祭』三号の一司の歌が冬ではなく夏・秋の歌であることを、作品はできなかったが立場上掲載しないわけにはいかなかった、という一司の心情についての想像でしか説明できないということである。前稿・本稿にわたって歌や歌案にみえる季節を表す語句を便利に使って作歌年次を推定してきたが、それは正当な方法なのか、という疑問も生じる。とはいえ今は上述した程度のことしか考えられない。

9 【7】黒表紙手帳(一四二)

押し型鮫皮模様黒色紙表紙の手帳。表紙に、NOTE と押し型文字。遊紙一枚。

○内容

短歌二十首。

右開き横野の手帳を奇数頁を上にして、奇数頁の一行目から偶数頁の一行目にわたり歌一行書き。一頁十五行、一行空けで、二頁につき八首が書きつけられている。

短歌の前に、「写生の異説抄記」として、次のような文章がある。

伊藤左千夫の写生説

写生と云ふより写生的といふべき。(以下略)

与謝野晶子

歌に叙景的だの写生だのではない。(以下略)

半田良平「啓蒙運動としての写生」

子規の寫生の唱道はルナーの「自然に帰れ」の絶叫とその軌を一にする(以下略)

また、末尾に天地逆に月曜日から土曜日までの時間割表がある。こ

の手帳を手許においていた時期に勤務していた小学校の時間割と思われる。その傍らにもう一つ、時間割表のうち担当しているコマを黒く塗りつぶしたもののらしい表が添えられている。一つを併せ見ると、一司は理科と音楽とは担当していなかったようである。音楽も理科も、一司の評論・エッセイにおいて重要な位置をしめる科目のように思われる。その科目を担当していなかったことは偶然なのかどうか、興味深いがここでは短歌のみをとりあげる。

○他文献との対応

◇『花軸』第一巻四号（昭和二十二年七月十日刊）との対応

〈4〉 淪落のはてに思へば ^{はれやかに} かしは旗を立てゝ進みき

〈1〉 淪落のはてに思へば ^{はれやかに} かしは旗をたてて進みき

「思ふ」全三首その第一首

〈10〉 陽にやけて野末に迷ふ一族のそのあとをゆくわれと思へり

〈3〉 陽に灼けて野ずえに迷ふ一族のそのあとを行くわれと思へり

「思ふ」全三首その第三首

〈13〉 廻廊の石あたゝけしはらばひてわれも ^{けものゝのわれは} けものかあなうらも乾す

は

〈2〉 廻廊の石あたゝけしはらばひてわれは ^{あふぐら} けものか ^を 乾す

「思ふ」全三首その第二首

○年次

本資料〈4〉〈8〉〈10〉〈13〉には右肩に✓が付いている。これらのうち〈4〉〈10〉〈13〉は右のとおり『花軸』四号に掲載されているので、緑表紙手帳（二四一）A群の○と同じく投稿あるいは掲載の印と思われる。ただし、

〈8〉 夏空のにはかに暗くなりてゆくけはしさを待つことしきりなり

は、✓はあるが『花軸』四号にもそのほかの刊行物にも見えない。また、
 〈15〉 火の山のふもとにありて祈りゐし行ひは今日の人に及べり
 は推敲の跡がおびただしいが、✓はなく、『花軸』四号にもそのほかの刊行物にも見えない。

『花軸』には投稿締め切りがあった。第一巻第一号の「会員募集」の広告に、

会員募集

花軸入会希望者は原稿を送付下さい

原稿締切 毎月十日限り

宛先 八頭郡丹比村大字南

杉原一司方花軸社

とある。

ところが、次の第二号で早々に締め切り日変更が告げられている。

原稿締切繰上げ

編集、印刷の都合により、原稿の締切を毎月五日に繰上げますから御

承知下さい（係）

第四号にも「投稿要領」として「締切毎月五日」とある。

第三号、第四号の奥付によれば、印刷日、発行日は次のとおりである。

第三号 昭和二十二年五月十五日印刷 同六月一日発行

第四号 昭和二十二年六月二十五日印刷 同七月十日発行

したがって、第三号の締め切りは五月五日、第四号の締め切りは六月五日であり、第四号掲載歌は昭和二十二年五月六日頃から六月五日頃までの間に作られたと推定される。

歌中の季節もそれと照応している。本資料の短歌二十首のうち、明確に季節を表す語句をふくむのは、先に引いた〈8〉「夏空の」のほか、

〈9〉 らんらんと吾が眼かゞやけ真夏日の野辺に平たき石よ飛びたて

〈11〉 山肌に梅雨はれ出でし土くれをくらはむとして来は来つれども
 の二首であり、いずれも夏である。ほかに、〈10〉「陽にやけて」と、

〈18〉 太陽の動かぬまひる沼へ行き婦女のミイラを抱きてしづまむ

も夏の印象がある。『花軸』第一巻第四号掲載歌〈4〉の前に三首、〈13〉の後ろに七首あるから、本資料に書きつけられている歌は、「五月六日頃から六月五日頃」の前後に少し幅をもたせて、おおよそ昭和二十二年夏に作られた、といつてよいと思う。書きつけられたのも同じ頃であろう。

【8】『俳句手帳』（一四三）

押し型網目模様焦茶色紙表紙の市販の手帳で、表紙左上に「俳句手帖」の枠無し題箋が貼付されている。また、末尾には「俳人住所録（ABC順）」として、阿部みどり女から百合山羽公まで五十六人の住所録が掲載されている。

奥付には次のようにある。

俳句手帳 昭和二十四年二月一日印刷

昭和二十四年二月五日発行

定価金四十五円

編輯者 青山うた

発行者 東井三代次

発行所 奈良県丹波市町川原城

振替口座京都三五六四八番

印刷人 岡島善次 奈良県丹波市町川原城

検印はないが、紙片を貼る位置は点線で示されている。当時、このように編者の名の出ている書冊が検印のないまま市販されることもあったのか、私にはわからない。一司がどのようにしてこの手帳を入手したのか不明である。

○内容

一頁目 左上に 189 と濃い青インク書

二頁目 「群盗 木 凍る」

「頭ガイ骨を釘を止める

夜 悪魔—— 天使」

三頁目から短歌。十一首、歌案四首分。

○他文献との対応

◇『メトード』第一巻第一号（昭和二十四年八月十日発行）との対応

〈1〉綿雲の中に消え没る釣革にぶらさがってるおひたどしい手

〈3〉雲ふかく没するほそき釣革にぶらさがってゐるおひただしい手

「指手」全四首その第三首

◇『メトード』第一巻第二号（昭和二十四年九月十日発行）との対応

〈4〉しゆるの葉の蔭となる卓商談は愛妾ひとりくれてやる件

〈2〉棕櫚の葉のかげになる卓商談は愛妾ひとりくれてやる件

早川則之名義「商談」全二首その第二首

〈4〉「しゆるの葉の」の歌の口は「妾」の書き損じである。「早川則之」については、塚本宛書簡【107】（昭和二十四年九月三日）に、「小生歌出来ないので八行の歌一首つくり、たらぬので仮空名で小生の二首出しました」とある。「小生の二首」のもう一首は、「ピジャマ着て娼婦キヤビネへたちのち鏡の中にある赤い月」であるが、こちらは本資料になく、『メトード』第一巻第二号とそれを転記したノート（一五四）にしかみえない。

○年次

【6】【3】の（2）ノート（五四）挟み込み紙1の項に述べたように、『メトード』第一巻第三号の実質上の投稿締め切りは印刷日の十日前であった。第一号・第二号も同様であったとすると、〈1〉の作られたのは、第一号の印刷日の昭和二十四年八月五日より十日前の七月二十六日以前、「綿雲」により春または夏と思われる。〈4〉は第二号の印刷日昭和二十四年九月五日より十日前の八月二十六日以前の作である。「綿雲の」の歌より後ろに書きつけられているので、春より前ではない。そして次の二首は、傍線部により夏に作られたと推測される。

〈8〉氷菓店 塀 新聞紙 赤インク コレラマンエン コールド・ウオー

〈10〉かたつむり通れる道のねん液と体臭で唱ったシャンソンと
季節を表す語句は、これら以外に、

〈9〉裂けて地にある花びらひろひ人間の童話をきかす。木月、五月にもある。「木月、五月」は、「六月」を「五月」に替えたのか、または

「六月、五月」の「六月」を削除したのか、いずれにしてももう春ではない。この歌においては「花びら」も「六月」、「五月」も、日常の世界における花びらや六月、五月とは切れているように見えるが、しかし、そうした問題、つまりいわゆる歌の自立性云々の問題とは別に、(8)と(10)との間にあることから、春はすでに終わり夏に入った頃に作られたと推定される。

【6】において、ノート(五四)挟み込み紙1の十三首は、そのうち二首が『メトード』第一巻第三号(昭和二十四年十月十日刊)に掲載されていることその他により、昭和二十四年八月二十七日頃から九月二十五日頃に作られ、書きつけられたと推定した。もし、前段の推定があたっているなら、この『俳句手帖』に書きつけられているのは、その前、おおよそ八月頃までの作である。(8)「氷菓店」の下句に、コレラの蔓延と「コールド・ウオー」すなわち冷戦が詠み込まれている。第二次世界大戦後、「コレラ船」が夏の季語になったり、「コールド・ウオー」という言葉が流布したりしたらしい。それが何年何月のことなのか私にはよくわからないが、昭和二十四年八月より後のことではないようである。

ちなみに、右に引いた(8)「氷菓店」の歌は、連続した名詞のみで成り立っているという点で、『メトード』第一巻第二号に載る「風景」と共通している。「風景」は、前記のように昭和二十四年九月三日の書簡【107】に「小生歌出来ないので八行の歌一首つくり」とあるから、その頃の作である。「氷菓店」が昭和二十四年八月頃までに作られたという推定が正しければ、この歌は、定型の枠内に収まっているという点では大きく異なるが、名詞を連ねるという手法については「風景」の先蹤ということになる。

結びとして、ここで取りあげた十点の作歌時期についての結論をまとめておく。【1】の(2)から同(5)までは、作歌時期・成立時期とも未詳、【3】の(2)以下は、【6】緑表紙手帳をのぞき作歌と資料成立の時期はほぼ同じと推測される。

【1】の(1)未定稿1(五二)

A群：昭和二十二年夏・初秋頃か

B群：昭和二十二年秋から冬

C群：同右

D群：(51)は昭和二十二年九月から十月頃

その他は昭和二十二年夏から二十三年一月頃までの間
成立：昭和二十三年一月初め頃から同月終わり頃までの間

【1】の(2)未定稿1(五二)挟み込み封筒：未詳

【1】の(3)未定稿1(五二)挟み込み紙1：未詳

【1】の(4)未定稿1(五二)挟み込み紙2：未詳

【1】の(5)未定稿1(五二)挟み込み紙3：未詳

【3】の(2)ノート(五四)挟み込み紙1

：昭和二十四年八月二十七日頃から同年九月二十五日頃までの間

【3】の(3)ノート(五四)挟み込み紙2

：昭和二十二年夏から秋の間

【6】緑表紙手帳(一四一)

A群：昭和二十一年秋以降同年十一月二十三日頃までの間

B群：同右

C群：昭和二十四年の春頃

成立：同右

【7】黒表紙手帳(一四二)：昭和二十二年夏

【8】『俳句手帖』(一四三)：昭和二十四年八月頃までの夏